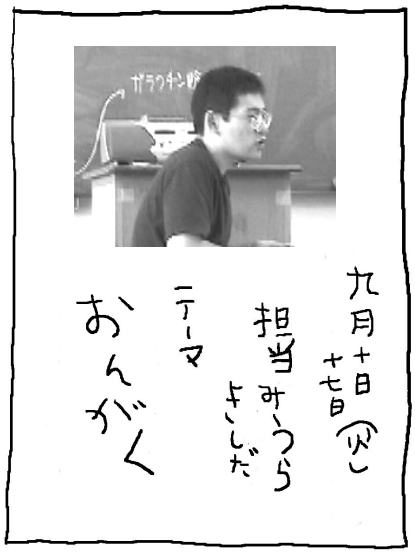
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「音楽をみんなで聴こう」 |
| Author(s) | 三浦, 隆宏; 岸田, 智 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 26-27 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/5422 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka




## 「音楽をみんなで聴こう」

三浦隆宏

音楽という、いわば共通のmediumを介して、私と生徒とのあいだで、また生徒どうしのあいだで、〈話して、聴く〉という、ことばのやりとりができたらいいなと思い、おこなった授業。(幸いにも、音楽を聴くのはきらいだという生徒はいなかった。)

生徒にはあらかじめCD　もしくはMDを持ってきてもらい、自分が聴きたい曲、もしくはみんなに聴かせたい曲を再生してもらう。そして、私がその生徒に「その曲のどういったところが好きなの?」「そのアーティストの曲でほかに好きなのは?」などといろいろ尋ね、答えてもらう。そのことで、自分の思いを他人に伝えることのむずかしさを実感するとともに、他の生徒の意

岸田　智

音楽雑誌の編集者をしていたという社会人経験を生かして、福井高での今回の授業では、「音楽を聴く」というテーマで二学期に2回、「小冊子を編集する」というテーマで二・三学期あわせて7回の、計9回の授業を担当した。

二学期の「音楽を聴く」に関しては、2回分の授業の目標を「好きな音楽を素材に自由に話し合う」といったところに大まかに設定し、まず1回目の授業で、生徒たちに普段好きで聴いている音楽を教室に持ち寄ってもらい、互いに聞き比べをしながら印象を述べたり意見交換を試み、2回目に今度は講師の岸田の方から、音楽を語るにはこのような方法もあるという1つのサンプルを、実際の曲を使って示そうと考えた。クラスには軽音楽部に在籍している生徒が何人かいるとの事前情報もあったので、音楽について活発な話し合いができるのではないかと考えていた。

実際の授業は、だが、こちらの思惑通りにはなかなか進まなかったと言える。生徒はめいめい自分の好きな音楽を持ってきてくれたが、順番に自分の曲をかけて簡単に曲の説明をし、岸田や他の阪大メンバーと2，3やりとりをした後は、他の生徒が持ってきた曲に関して、隣に座っている仲のいい友人と仲間内の会話をすることはあっても、クラス全体に対して自分の印象や意見を発言することはなかった。生徒の口は少な

見を聴くことによって、その生徒の新たな一面をも発見してもらいたいと思ったわけである。

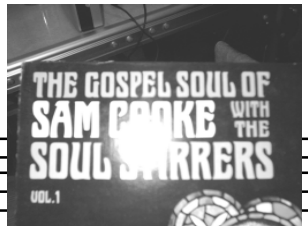
もちろん、じっさいのところは、いろいろな曲をかけていれば2時間なんてあっという間だし(ぜんぶで２０曲ちかく聴いた)、生徒も（1学期のように）ひとの話ばかり聴かされるのよりも、音楽を聴かされるほうがまだマシだろう、という考えもあった。なにしろ、9月の上旬はまだ暑かったから。

「ただ、ぼくぜんと聴いているだけでは眠たくなってしまうから」というのを理由にして、その日に聴いた曲を〈よく知っている曲〉〈聴いたことはあるけどあまり知らない曲〉〈ぜんぜん知らない曲〉に分類する作業と、「きょう聴いた曲のなかで、いちばん印象に残った曲は何でしたか。また、その理由は何ですか？」という問いにたいする答えを書く作業は、最低限の課題として課しておいたのだけれど、みんなそれなりにきちんと書いてくれていた。

私じしん、この授業において、平井堅の『大きな古時計』と〈出会えた〉し、また（私の好きな）ミスチルがいまの高校生のなかでも根強い人気を持っていることを知れたことなど、いろいろと収穫はあった。そのうえ、ある生徒からは「自分入れて１０人の音の好みとかが分かっておもしろかった。」という感想まで得たわけだから、「この授業はまずまずうまくいった」と思っているしだいである。

（みうらたかひろ）

からず動いており、何かは話されているのだが、それが1人ないし数人の間のおしゃべりに止まって、クラス全体へ発せられる意見、発言にはならないという印象だった。2回目の授業も、講義形式中心の展開となったため、クラスの雰囲気は変わらなかった。

生徒が積極的に発言しづらかった理由には、素材を「好きな音楽」としたことも関係していただろうと思う。その曲や音楽が好きな理由は？と聞かれても、当人でもそれを言葉で説明することは難しいし、また、人が好きだというものについて、その感覚や嗜好を云々することはどこか憚られるものだからだ。その意味で、活発な話し合いを期待する素材としては、音楽というテーマは少しハードルが高かったかもしれず、授業を作るこちら側にテーマ決めに関て、安易さがあった点は反省すべきかもしれない。　ただ、生徒の言葉が仲間内のおしゃべりに止まって、クラス全体への意見として発せられないということについては、それだけが理由ではないようにも感じた。どこか表立って意見を表明することを恐れているようにも見え、自分の意見が議論の俎上に上ることを避けているように感じられた。単なる憶測だが、仮に自分の意見が否定されると、人格までも否定されたように感じてしまうのだろうか。音楽について自由に話し合おうと授業の最初に呼びかけるときに、意見交換をするのは意見の優劣を決めるためではなく、クラスが共有できる意見の場といったものを作りたいからだ、ということをわかりやすく説明すべきだったかと思う。

（きしださとし）